かずさの博物誌

ハイタカ

～冬の荒れ地でスズメを狩る～

文・写真／成田篤彦

2011.12.20

晩秋のさわやかに晴れた日、ハト大の鳥が農家の屋敷林から急に飛び上がり、上空で旋回した。

「羽ばたきが細かい」と思った。

「チョウゲンボウか？」と数回シャッターを切る間に、小櫃川を渡って飛び去った。

カメラの液晶画面で拡大してみた。つばさの先が6枚。「ハイタカだ。久しぶり」と心が躍った。

飛び去った方向から、「市街地の放棄水田に行ったのでは？」と考えた。

翌々日の夕刻前に、そこへ行ってみた。

ちょうど友人が来ていて、「ここでハイタカの写真が撮れた」と教えてくれた。

友人が帰った後、一羽の見なれないハト大のほっそりした鳥が電線に止まっていた。

▲ハイタカ　タカ目　タカ科
体長40～44cm。上総では冬鳥、国の準絶滅危惧種、県重要保護生物＝2011年11月22日木更津市

▲こちらを見るハイタカ
首を180度曲げている
＝2011年11月22日木更津市

「こちらを見ている？」と思った。双眼鏡でのぞくと、頭の後ろに白紋が2つあった。

「これにだまされたのか」と合点した。

近づいて、シャッターを切った。液晶画面を見ると猫のような大きく円い眼が写っていた。気付かないうちに首をくるりと180度曲げ、こちらをじっと見ていたのだ。

「これには参った」と思った。

彼？は電線からさっと飛び降り、荒れ地の草むらすれすれに飛行した。十数羽のスズメがパァーっと飛び去った。

「どこへ、行ったのか？」と電線や木の枝を探しまわった。

すると農道から数メートルしか離れていない草むらの棒の先に止まっていた。その高さは1mもない。

「こんなシャンスもあるのか」と幸運にワクワクした。

あいにく、三脚を持っていなかったので道路に座り込んでピントを合わせた。しかし、草の茎が邪魔してハイタカの眼に焦点が絞れない。うっかり動けば飛び去る。ゆっくりとバックしてシャッターを切った。今までは、遠くからの撮影ばかりで、満足に写せたためしがなかった。これで近づいてやっと撮れたと嬉しさが込み上げてきた。

止まっている姿は初めてだ。確信が持てないので、友人に写真を送った。すると「ハイタカで、その特徴は中指が特別に長い」と返答してくれた。再度、写真を見るとそれは外の指より2倍近くも長い。

じっくり見たハイタカは思ったよりふっくらしていた。まだ、若いタカかもしれないが、眼にそれほど鋭さはなく、クリクリしていて、可愛いタカだと感じた。

さて、晩秋から冬にかけて、上総でも、水田地帯の周辺の木からスズメの群れに向かって急降下する姿を見かける。

彼らは、一団となって空中へ逃げるスズメの群れから外れた一羽をねらって斜め後ろから蹴りを入れて、長い爪でつかまえるそうだ。

ハイタカはオオタカの成鳥に似ているが、二周りも小さい。雄はさらに一回り小さい。成鳥は上面が灰青色で、下面には赤さび色の横じまがある。昔は雄と雌で全く別な種と思っていのので、メスをハイタカ、オスをコノリと名付けていた。別名スズメタカともいう。この鳥もかつて鷹狩りの時に、スズメ位の小鳥を捕えるために時々用いられてきた。

このタカはユーラシア大陸の温帯から亜熱帯に繁殖地を持つ。日本でも本州以北で繁殖し、留鳥だが一部は冬季に暖地へ移動する。

房総では晩秋から冬にやって来る。繁殖地では小鳥が減っているので、このタカも少なくなった。

国の準絶滅危惧種（NT）で、県では重要保護生物に指定している。

上総でも珍しいタカだ。

それだけに、毎年訪れてくれる自然を残しておきたいものである。

▲旋回するハイタカ＝2011年11月20日木更津市

〈主な参考文献〉
標準原色図鑑5巻「鳥」1967保育社、山渓カラー名鑑『日本の野鳥』山と渓谷社。

◎写真・文章の無断転載を禁じます。